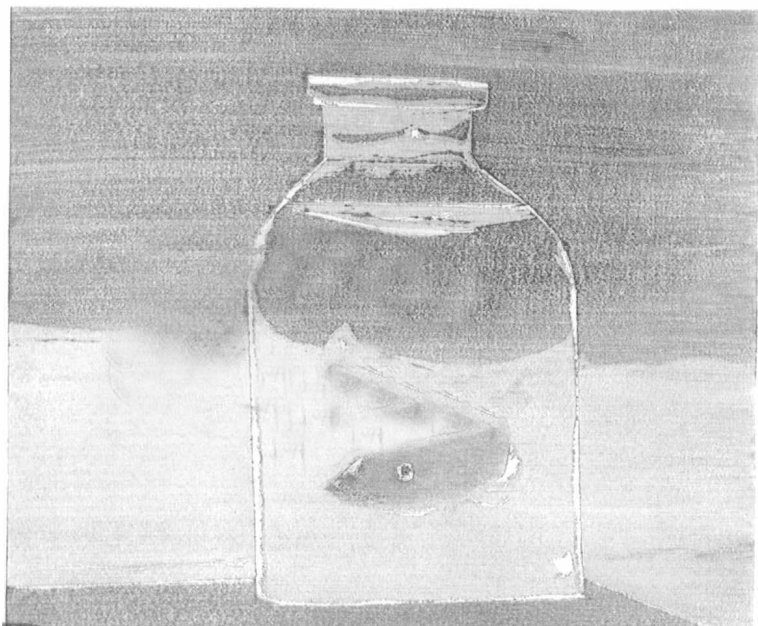


母の霊

耕 治人



河出書房新社

母の霊 ©1977

昭和五十二年十二月二十日初版印刷

昭和五十二年十二月二十五日初版発行

著者 耕治人

発行者 佐藤皓三

発行所 河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五

電話（営業）〇三―三五五―五三二一

（編集）〇三―三五五―五三二一

振替口座（東京）〇一〇八〇二

印刷 東洋印刷

製本 小高製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

谷底

5

骸骨踊り

37

母の霊

85

二人の兄

157

平林さんの体

185

あとがき

221

装画・清宮質文

カバール「暗い夕日」より「虜囚の窓」
扉「暗い夕日」より「壕の中の魚」

作品集母の霊

谷底

私が恩師の立石先生の夫人に、弟が家建てるため土地を探しているが、どこかないだろうかと、尋ねられたのは、終戦の年から八年目で、その前の年私は中野・野方に土地を借り、家を建てたのであった。

夫人がその話をされたのは、私が、立石家の応接間で、立石先生が、書斎から、出てこられるのを待っていたときだった。わきには妻のひろ子がいた。

野方に越してくるまで、私共は豊島・長崎の、六軒長屋にいたのだが、家主が、長屋を売ることになり、住んでいるものに買って貰いたい、といってきた。建物は古くなっていたし、ほかにいいくつか事情があって、引越すことにしたのだが、家を建てるつもりはなかったのだ。

アパートか貸家に引越すつもりだった。当時はまだ空襲の焼跡が方々に残っていて、今日とは違った意味で住宅難だった。

アパートも貸家も少なかったのだ。大きな貸家ならあったが、一ト月や二タ月ならともかく長い年月住んでゆけそうになかった。

仕方なく、三十坪位の土地を探して、住宅公庫の融資を受け、家を建てることを思い立ったのであった。

土地探しではずい分苦労した。

立石先生のお宅には月に一回お伺いすることもあれば、二タ月か三月に一回ということもあったが、立石先生が出てこられるのを待っているあいだ、顔を出された夫人に、苦労話をしたことがあった。

ほかに話すことがないし、黙っているわけにゆかないから、断片的にポツリポツリ話したのであった。

夫人はそれを覚えていられ、尋ねられたのだと、思ったから、東京のどこそこにこんな土地がありましたと、説明したのだ。

それでその話は済んだものと思っていた。私は立石先生のお宅に何うようになってから、相当経つが、夫人の弟さんに会ったことがなかった。そのせいかもしれないが、その話がどうなったか、夫人に聞いたこともなかった。

ところがそれから半年ばかり経ってからと思うが、夫人がこんなことを言われた。立石先生の友人で、二百坪求めている人がいる。そのうちの五十坪弟が分けて貰うことになった。あな

たの家近くに、空いた土地があるそうだが、地主を紹介してくれないか。

その時もやはり立石先生が書斎から出てこられるのを待っていたときだった。私の家は十坪だが、土地は八十九坪だ。三十坪位の土地が見つからないので、困り果て、そんなことになったのだが、地主はすぐそばで、界隈にたくさん土地を持っていた。私共の家と道路を隔てたところにもある。そのことはいつかお話したことがあった。しかし弟さんが土地を探しているが、どこかないだろうかと言われたときは、その空地のことは黙っていた。なぜだか分らない。無意識のうちに警戒する気持もあったのかもしれないが、立石先生のお宅にはお客が多い。夫人が頼まれたのは、私だけでないはずだ。私より有力な、世間の広い人が、見つけてくれるに違いない、と思ったようだ。

立石先生のその友人は金内というそうだが、もちろん私は会ったことがない。夫人は金はいくらでもあるから、金のことで心配はかけない、ともいわれた。

私が承知したのでそれから四五日経って、金内と、夫人の弟が連立って見えた。弟の名は塚本といった。その時はじめて塚本氏に会ったのである。

地主には前もって話しておいた。塚本氏が、文学者の立石先生の義弟であることも話した。文学と無縁な地主だが、立石先生の名は知っていた。終戦後立石先生の名は知れ渡ったようだった。

その時も、それで私の役目は終った、と思ったのだ。

ところがひろ子が、地主のところへ、地代を届けにいったとき、金内から、まだ返事がないことを聞かされたのだ。

金内の住いは、尾久の方ということだったが、はっきりしたことは分らないし、電話番号も知らなかった。

それでひろ子が、立石先生のお宅へいった。立石先生は、東京から電車で四十分位の立石町にいられるので、私もひろ子も立石の先生といっているのだ。

夫人は、ひろ子の話を聞かれると、「それはおかしいですね」といい、金内の、電話番号を教えられた。

東京へ戻ってから電話したら、「いま出掛けている」ということだった。日を置いて電話したが、やはり留守だった。

私もひろ子も地主と往来で会ったときなど、具合の悪い思いをした。

放っておけないで、又ひろ子は、立石先生のお宅へいった。そのとき、夫人は、金内が、高い、といっているということを、言われたのだ。

私は、ひろ子からそれを聞いて、おかしい、と思った。金内は、金持ちで、金のことで心配はかけない、といわれたのであった。しかし私は深くは考えなかった。

そのことを地主に伝ええると、二百坪の話がまとまったら、あなた方（私共のこと）にお礼しようと思っていた、その分だけ引こう、といった。

私はお世話になった立石先生の夫人から、頼まれたことだから、この話が、まともればよい、と思つていたので、お礼など貰おうとは、はじめから思つていなかった。そうしてくだされば有難い、といった。地主は、この話はブローカーが持つてきたのでないから、といい、最初から、いくらか安くしてあったのだ。

私共はそれで話がまとまることを願つた。まともならなかつたら、塚本氏は、家を建てることが出来ないのだ。

地主が値引きしていることを金内に伝えるため電話したら、やはり不在だった。それで返事を貰いに立石先生のお宅へゆくことになったが、今度も金内の返事が夫人の方へあったのだ。それによると金内は、工場を売つて、二百坪買うつもりだったが、売れないから、買えない——と言つてゐるということだった。

私は金内をひどい人だと思ひ、塚本氏を氣の毒に思つた。

それから一年ばかり経つてからだった、塚本氏がひょっこり私の家にやつてきた。そして会社の同僚が、百五十坪欲しいといつてゐる、そのうちの、五十坪自分が分けて貰ふことになつた、といった。

金内の話が毀れてから、大分日が経つたし、地主は、立石先生の義弟である塚本氏には同情してゐたから、私が、塚本氏と、彼の同僚を連れ、地主宅へいった時も、嫌な顔は見せなかつた。

塚本氏の、同僚という人は、大会社の重役の息子ということだったから、私は今度こそまると、と思ったのだ。ところがその返事がなかなか貰えなかった。

大分月日が経ってから、その同僚の父が重役をしている会社の経営が悪化したため買うことをあきらめた、と塚本氏が、一人でやってきて話した。

塚本氏は元気がなかった。塚本氏は、小岩の、いとこの家の庭に、六畳一間、台所、便所を建て、親子四人で住んでいるのだそうだった。

次ぎ次ぎに話が駄目になるが、なんだか私にもかかわりがあるような気がした。

私が八十九坪借りて、十坪の家を建てたのは、終戦後間もなく訪れた出版ブームのためだった。

私のはじめて立石先生を訪ねたのは、日華事変がはじまった頃で、それまで勤めていた雑誌社をやめ、小説をかき出した私を見て、出版社に勤めていた友人が、紹介してくれたのであった。

その時先生は、同じ立石町ではあるが、四部屋位の家に住んでいられ、書斎兼客間に、すぐ通し、温かく接しられた。原稿も見てくださるようになった。戦争のため出版の方がだんだん淋しくなったためかお客は少なかった。

私は時々訪ねるようになったが、喋るのはもっぱら私で、先生は笑いながら、聞いていられた。先生は無口の方だったが、窮屈さは感じなかった。そのうちひろ子も一緒にゆくようにな

り、泊めていただいたこともあった。

先生の紹介で、作品を発表したこともあった。

いちいち並べないが、先生に師事出来たことを有難く思い、紹介してくれた友人に感謝したのであった。その友人は太平洋戦争がはじまった頃病気で亡くなったが――。

太平洋戦争開始の翌年私は杉並の飛行機工場に徴用された。仕事は、現場の機械組立工だった。

それまでのように立石先生を訪ねることが出来なくなった。

戦争が激化すると資材不足のため、仕事が出来ず、工場を、早退けすることがあった。空襲のため、工場に行けない日もあった。そんなとき、家にこもり小説をかいいた。

それが終戦後訪れた出版ブームのため金になったのだ。十五篇位あったように覚えているが、みな金になった。

このブームは四五年続いたように思うが、この間私のような者でも、書きさえすれば売れた。こうして貧しかった私共にはじめて貯金が出来たのだ。ひろ子のお蔭もあったが――。

この貯金があったので、土地を借り、家を建てたのだが、そのことでも私は、立石先生に恩を感じていた。

ただ八十九坪借りるための権利金と、十坪の建築費は、公庫の融資を受けても、貯金では足らなかった。

それで六軒長屋に住んでいたときひろ子が知合った近所の人が、毎月少しずつ返すという約束で、貸してくれたのであった。

このことは立石先生には話していなかった。

それまでの立石先生だったら、当然話したのだが、私共が家を建てる六年前（終戦の翌年）、四部屋の家から、広壮な邸宅へ移られたのであった。

それから応接間で待つようになったのだ。

文学者としての仕事が多忙なところへ、公職につかれたのであった。時には旅行もされた。もう原稿を見ていただくどころでなかった。お眼にかかることさえむづかしくなった。ようやくお眼にかかっても、ろくに話は出来なかった。夫人の方も話しこむということはされなくなった。

それで塚本氏のことでは度か訪ねても、立石先生に会うことは期待しなかった。会えないときの方が多かったのだ。

しかし立石先生から受けた恩は返さねばならないという気持は、いつも持っていた。

その気持が、塚本氏の土地の話と結びついたのは、塚本氏の同僚が百五十坪買うことが駄目になったあと、塚本氏が、いこと喧嘩し、立退かねばならなくなった、と知らせにきたときだ。

私はじっとしてられない気がした。